

大風マラソンボランティア

百人ほどの男性が力を合わせて太い手綱を引き上げる百畳敷きの大風。五月の青空を多くの見物客の歓声に合わせて大風が上空に勇壮に舞い上がります。私の住む春日部市には、毎年五月の連休に大風祭りという大きなイベントがあります。江戸川河川敷で行われるこの大風あげがメインイベントであることはもちろんですが、このイベントの一つとして行われる「大風マラソン大会」も大きな行事です。

この大会は近年、全国から約一万人の参加申し込みがある大規模なものです。私の通う中学校では、全校にマラソン大会のボランティア参加を呼びかけ、この活動を通して地域に貢献しています。

ボランティアの主な仕事は、ランナーの給水のために紙コップを用意したり、受付などの手伝いをしたりすることです。今年、マラソン大会ボランティア募集の連絡があった日、同じ部活の智美が「ねえ、私大風マラソンのボランティアに参加してみようと思うんだけど、一緒にやらない。」と誘ってきました。私は中二ですが、これまでボランティアという活動をしたことがありませんでした。あまり気乗りはしなかったのですが、思わず「うん、いいよ。」と答えてしまいました。

五月四日、大会当日の朝です。「早くしなさい、遅れるわよ。」と言う母の声にせかされ、「わかってるよ、うるさいなあ。」とブツブツ言いながら、智美との待ち合わせの場所に向かったのです。

最初に受付の手伝いをしたあと、給水の仕事に入ることになりました。どちらも短い時間の中で多くの人に対応しなければならぬので大変な仕

言葉が出てきませんでした。むしろ、(こんなに一生懸命やってあげているのに...)という気持ちが強く、割り切れない気持ちでいっぱいでした。人の波が落ち着いた頃、「終わったね。」と智美が言いました。私は聞こえないふりをして、自分の荷物を探し「お疲れ。先に帰るね。」と一言だけ言ってその場を離れました。なんだか無性に腹が立っていました。私は何でこんなに怒っているんだろうと思いましたが、その答えは自分でもわからないままでした。夜、智美から、「怒ってる？無理に誘ってごめんね。」とメールがきましたが、「別に怒ってないよ。」とだけ返信しました。

次の日、智美と会っても「おはよう」とあいさつはしたけれど昨日のマラソン大会のことは一言も話しませんでした。自分でもよく分からないけれど、なんとなくすっきりしない自分がいました。一週間くらいたったある日のことです。智美が、一通の手紙を見せてくれました。「先生が、ボランティアに参加したみんなに見せてって。」そういつて手渡された手紙には見覚えのない女性の名前が書かれています。

前略

私は、先日のマラソン大会に参加させていただいた者です。一言お礼とおわびをと思ひ筆をとりました。

五月四日、私はこの日を楽しみにしておりました。この数年、病氣治療を続けながらリハビリのつもりで走り始めていたのですが、おかげさまでだいぶ体調も良くなり、本格的に走れるようになってきました。そこで、自分に挑戦してみようと、思い切って大会に参加したわけです。ところが当日、途中の給水所ですみずいてしまい、たくさん紙コップをひっくり

事です。コースの後半の場所を担当した私は、智美と一緒に用意されたたくさん紙コップに水を入れ、テーブルの上に並べ、ランナーを待ちました。速くにランナーの姿が見えてきました。(さあ、どんどん紙コップを補充して、ランナーに出せるようにしなくちゃ。)とどきどきしながらその時を待っていました。初めての経験ですので、(失敗してはいけない。)と、とても緊張してランナーを待ちました。

どんどんランナーがやってきます。と、その時でした。一人の女性が紙コップをとろうとした瞬間、つまずいてしまい、テーブルに倒れ込んでしまったのです。智美と私は、倒れたテーブルの上に乗っていた紙コップに入っていた水のほとんどを浴びてしまい、顔もジャージも水にぬれてしまいました。

「大丈夫ですか。」とスタッフのみんなに声をかけられたその女性は、片手をあげただけで、すぐに立ち上がりコースにも戻っていきました。私は、顔の水をふきながら「何、これ。」と思いましたが、他のランナーがどんどんやってきます。一生懸命、新しい紙コップに水を用意しているのですが、それでも間に合いません。「ありがとうございます。」と言ってくれる人もいますが、「水がないの。」「早くして。」と言われるしまつです。焦れば焦るほど手が思うように動きません。あつという間のことですが、そのたびに智美は「すみません。」「ごめんなさい。」とランナーにあやまっています。私は、何も



返してしまいました。とにかく前へ前へ...と走ることに精一杯だった私はあの時給水所にいた人たちに何も言わずに走ってしまいました。あとからスタッフの人に聞いてみたら地元の中学生のボランティアの生徒さんだとか。一言、お礼とおわびが言いたいと思いつつながらもそれできずにあの日帰宅したのでした。

完走することを目標に参加した大会でした。走りきることができて、本当に良かった。これまであきらめずに自分を信じて、治療も走ることも続けてきて本当によかったと思つています。うれしさでいっぱいです。このように走りきることができたのは、大会を支えてくれた多くのスタッフの方のおかげです。ありがとうございました。あの時、お水をかけてしまった中学生のお嬢さんたち、ごめんなさいね。コップをみんな倒してしまつたのに「大丈夫ですか。」と声をかけてくださって、本当にうれしかったです。皆さんのご協力があった私の願いも実現できたのだと思います。皆さんの活躍が私の生きる支えになりそうです。体に気をつけ、来年、またぜひ大会に参加させていただきたいと思つています。

本当にありがとうございました。

草々

「ボランティアって仕事をするだけでなく、もつと多くの感動を与えるのね」と手紙を読み終えて、私は智美に話しかけていました。「本当だね、この人も完走できて、そして新たな希望をつかんだみたいでよかったね。私も嬉しくなっちゃった。」と返事が返ってきました。「ボランティアがどんな意味があるのかわかっていなかった自分。この体験は、私に新たに大切なことを教えてくれました。」

(よーし、これからは...)と誓う私の心の中を、江戸川からの風が青田をわたってさわやかに吹き抜けていきました。